いそぽ物語の原典の系統について

——古活字版寓話部序の分析を通じて——

遠　藤　潤　一*

What kind of Aesop's Fables in Latin was translated into Japanese by the Jesuit missionaries in the 16th century?

— By analyzing the preface of the fables in 'Kokatsujiban Isopomonogatari' —

Jun-ichi Endō

はじめに

本論は古活字版「伊曽保物語」（第1種本[1]）の寓話部序，すなわち中巻第十「いそほ物のたとへをひきける事」の具体的分析を通じて，古活字本そして天草本（ただし上巻のみ）の原典の系統を追求するものである．なお，本論は先行の拙論「いそぽ物語試論[2]」（その1～その5），「いそぽ物語の研究—Caxton 集と古活字本・天草本—[3]」を基盤にしているものである．

1

天理図書館に『Vita et Fabulae』(with the Italian translation of Francesco del Tuppo. Napoli. 1485) と称するラテン語イタリア語対訳イソップ寓話集が所蔵されている[4]．これは，上田敏氏が『伊曽保物語考[5]』において，「——伊太利亜には一四八五年の Tuppo 訳，—」と言及しているシュタインヘーヴェル集のイタリア語訳本に該当する本であろうか．この Tuppo 集（以下，このように呼ぶ）は，ラテン語の本文にイタリア語の訳文・解説等を付したものであるが，その構造は次のようになっている．

① 序文
② イソップ伝 (LIBISTICI FABVLATORIS ESOPI VITA FELICITER INCIPIT.)
③ 寓話部（64話）

このように寓話部の構造はシュタインヘーヴェル集・カクストン集と比較すると，単純簡素である．

この寓話部と古活字本・天草本の寓話部とを比較すると〔表1〕のようになる．この表には参考としてカクスト集との比較をも示しておいた．

この〔表1〕を見るとわかるように，Tuppo 集寓話部はロムルス集第1巻から第3巻までに該当する内容なのである．64話中，第1話・第22話・第61～64話の計6話を除いて，あとはカクストン集のロムルス集第3巻までの寓話に対応する[6]．本文は，まずラテン語

* 国文学研究室（昭和57年9月16日受理）

〔表1〕 Tuppo 集寓話部と古活字本・天草本寓話部との比較.

Tuppo 集	古活字本	天草本	Caxton集
1. Prothesis comparatiua. (序)	0. 伊曽保物のたとへをひきける事 (中10)		序
2. De gallo et iaspide. (鶏と宝石)			1
3. De lupo et agno. (狼と小羊)	1. 狼と羊の事 (中11)	1. 狼と羊のたとえの事	2
4. De mure rana et miluo. (鼠と蛙と鳶)			3
5. De cane et oue. (犬と羊)	2. 犬と羊の事 (中12)	2. 犬と羊の事	4
6. De cane gerente carnem in ore. (犬と肉片)	3. 犬としゝむらの事 (中13)	3. 犬が肉を含んだ事	5
7. De leone oue capra et iuuenca. (獅子・山羊・羊・雌牛)	4. 師子王・羊・牛・野牛の事 (中14)	4. 獅子と犬と狼と豹との事	6
8. De femina nubente furi. (盗人と太陽)	5. 日輪と盗人の事 (中15)		7
9. De lupo et grue. (狼と鶴)	6. 鶴と狼の事 (中16)	5. 鶴と狼の事	8
10. De duabus caniculis. (二匹の犬)			9
11. De viro et colubro. (人と蛇)			10
12. De apro et asello. (驢馬と猪)	7. 獅子王と驢馬の事 (中17)		11
13. De mure rustico et vrbano. (田舎の鼠と都会の鼠)	8. 京田舎の鼠の事 (中18)	6. 鼠の事	12
14. De vulpe et aquila. (狐と鷲)	9. 狐と鷲の事 (中19)		13
15. De aquila et testudine. (鷲と蝸牛)	10. 鷲とかたつぶりの事 (中20)	7. 鷲と蝸牛の事	14
16. De vulpe et coruo. (狐と烏)	11. 烏と狐の事 (中21)	8. 烏と狐の事	15
17. De leone apro tauro et asello. (獅子・野猪・雄牛・驢馬)			16
18. De catulo hero et asello. (小犬と驢馬)	12. 馬と犬との事(中22)	9. 犬のこと馬の事	17
19. De leone et mure. (獅子と鼠)	13. 獅子王と鼠の事 (中23)	10. 獅子と鼠の事	18
20. De miluo et eius matre. (鳶とその母)			19
21. De irundine et rustico. (燕と農夫)	14. 燕と諸鳥の事(中24)	11. 燕と諸鳥の事	20
22. De Athenien sibus petentibus regem.	15. かはづが主君を望む事 (中25)	12. イソポ, アテナスの人々に述べたるたとえの事	序
23. De ranis et hidro eorum rege.			21
24. De regio accipitre et columbis.	16. 鳶と鳩の事 (中26)	13. 鳶と鳩の事	22
25. De fure et cane. (盗人と犬)			23
26. De lupo et succula. (狼と母豚)		14. 狼と豚の事	24
27. De terra purturiente murem. (大地のお産)			25
28. De lupo et agno. (狼と小羊)			26
29. De cane et eius domino. (犬とその主人)			27
30. De silua leporibus et ranis. (野兎と蛙)			28
31. De lupo et hedo. (狼と子山羊)			29
32. De rustico et angue. (農夫と蛇)			30

33. De ceruo oue et lupo. (鹿と羊と狼)			31
34. De musca et caluo. (蠅とはげ頭)			32
35. De vulpe et ciconia. (狐と鶴)	※62. 鶴と狐の事（下32）		33
36. De lupo et ceruice humana. (狼と木偶)			34
37. De graculo et pauonibus. (烏と孔雀)	17. 烏と孔雀の事(中27)	15. 孔雀と烏の事	35
38. De mula musca et mulione.			36
39. De musca et formica. (蠅と蟻)	18. 蠅と蟻の事（中28）	16. 蠅と蟻の事	37
40. De lupo vulpe et simio. (狼・狐・猿)			38
41. De viro et mustela. (人間といたち)	19. 鼬の事（中29）		39
42. De rana et boue. (蛙と牛)	※52. 蛙と牛の事（下22）		40
43. De leone et pastore. (獅子と牧人)	※ 獅子王とパストルの21. 事（中31）		41
44. De equo et leone. (馬と獅子)	20. 馬と獅子王の事（中30）	17. 獅子と馬の事	42
45. De equo et asello. (馬と驢馬)	22. 馬と驢馬の事(中32)	18. 馬と驢馬の事	43
46. De pugna auium cum quadrupedibus. (鳥たちと獣たち)	23. 鳥けだものと戦ひの事（中33）	19. 鳥と獣の事	44
47. De philomena et accipitre. (ナイチンゲールと鷹)			45
48. De lupo vulpe et pastore. (狼・狐・牧人)			46
49. De ceruo et fonte. (鹿と泉)	24. かのしゝの事(中34)	20. 鹿の事	47
50. De viro et uxore. (男と妻)			49
51. De iuuene et thayde.			50
52. De patre et eius filio. (父と息子)			51
53. De vipera et lima. (まむしとやすり)			52
54. De iupis et ouibus. (羊たちと狼たち)			53
55. De villano luco et securi. (山と杣人)			54
56. De lupo et cane. (狼と犬)			55
57. De conspiratione membrorum aduersus stomachum. (人間の手足と胃)	26, 腹と五体の事(中36)	21. 腹と四肢六根の事	56
58. De simia et vulpe. (猿と狐)			57
59. De asello et institose. (驢馬と人)	27. 人と驢馬の事(中37)		58
60. De argo ceruo et bobus.			59
61. De ludeo et pincerna regis.			
62. De ciue et equite regis.			
63. De capone et accipitre.			
64. De mercatore et eius uxore. (商人とその妻)			
以上合計64話（「序」も含む）	合計29話（「序」も含む）	合計21話	

注
1. Tuppo 集の寓話番号は筆者が依拠した天理図書館本におけるものである.
2. 古活字本・天草本の寓話番号は，まず筆者の付した通し番号を示し，寓話題名の後に，たとえば「中巻第十一話」を（中11）のようにして付した.
3. Caxton 集の欄は Tuppo 集との対応を知るために加えたもので，寓話番号を筆者の付した通し番号によって示したもの.
4. 古活字本・天草本の欄の※印は，その寓話配列順序に問題があることを示す.

本文を掲げ，次にそのイタリア語訳文，そして，イタリア語での解説等を付したものである.

2

寓話部で第1話「PROTHESIS COMPARATIVA. FABVLA. I.」とあるのは寓話部の序文（または第1巻の序文）である．それは次のようなものである（筆者下線部は注(9)参照).

|v|T IVVET ET PROSIT CONATVR PAGINA PRAESENS:
Dulcius arrident seria picta iocis.
Hortulus iste parit fructũ cũ flore:
fauorẽ
Flos & fructus emunt: hic nitet:
ille sapit.
Si fructus plus flore placet fructum lege: si flos
plus fructu: florem: si duo: carpe duo.
Ne mihi torpentẽ sopiret inertia sensum:
In quo peruigilet mens mea mouit opus.
Vt messis precium de uili surgat agello:
Verbula sicca deus complue rore tuo.
¶Verborum leuitas morum fert pondus honustum:
¶Et nucleum celat arida testa bonum.

以上であり，このあとにイタリア語による「YMAGO」,「TROPOLOGIA」,「ALLEGORIA」,「ANAGOGE」,「EXEMPLVM」が付く[7].

この序文は天理図書館蔵『Æsopi Fabvlae』(Antverpia. Petrus Aegidius. 1545) というラテン語本の扉にも見えるものである．この本はイソップ伝を持たない寓話集で，寓話部の内容は Tuppo 集に一致すると言えるものである[8].

また，この序文は天理図書館蔵『Mythologia Æsopica』(Isaaci Nicolai Neveleti. Francofurtum. Nicolai Hoffman. 1610) というギリシア語ラテン語対訳系の本の寓話部にある『Anonymi Fabvlæ Æsopeæ』(「無名氏によるイソップ寓話集」．この集はラテン語本文のみ）の冒頭にも掲げられている[9]．この寓話集は60話を有し，Tuppo 集そして前述の1545年アントワープ刊本と同系である.

ところで，この序文で注目すべきことは，この文章が「花(はな)と実(み)」のたとえを主体としたものであるということである．その点に触れる前に，まず，その日本語訳文を掲げてみよう[10].

本書は，楽しみとなり，益あらんことを目指している[11]．荘重に描かれたものは，冗

談以上に，笑いを誘うものである．

この庭園は，花とともに実をうみだす．花と実とは，好意（称賛）をかち得る．花は美しく輝き，実は良い味がするから[12]．

もし実が花以上に気に入るなら，実を集めなさい．花が実以上に気に入るなら，花を集めなさい．もし両方が気に入るなら，両方を摘みなさい．

怠惰が私の鈍い感覚を眠らせる[13]ことのないように，感覚において私の魂が目ざめているように，私の魂は仕事をした[14]．

卑しい土地[15]から，高貴な収穫[16]があがるように，神よ，乾いた（無味乾燥な）言葉をあなたの露でぬらして下さい[17]．

言葉の軽やかさ（軽さ）は，人となりの実直な重さを担うものであり，乾いた硬い殻は，良き核をおおっているものである．

3

Tuppo 集，そして上述の1545年アントワープ刊本，および1610年刊 Neveleti 集では，この序文の後に寓話部が始まるが，その寓話第１話は「De gallo et iaspide.」すなわち「庭鳥と玉」である．そうすると，古活字本寓話部序「いそほ物のたとへをひきける事」（中巻第10話）は，ヨーロッパ語原典におけるこの序文と寓話第１話とを一つにしたものであろうと推定することができるのである．古活字本寓話部序は次のようになっている．

十　いそほ物のたとへをひきける事

つらつら人間のありさまを案ずるに，色にめで香に染めける事をもととして，よき道を知る事なし．されば，この巻物を一本の植木には必花実あり．花は色香をあらはす物なり．実はその誠をあらはせり．されば，庭鳥になぞらへてその事を知るべし．庭鳥，塵あくたにうづもれて餌食をもとむる所に，いとめでたき玉をかきいだせり．庭鳥かつてこれを用いず，踏みのけてをのれが餌食をもとむ．そのごとく，あやめも知らぬ人には，ただ庭鳥にことならず．玉のごとくなるよき道をばすこしも用ず，あくたなる色香に染みて一生をくらすものなりとぞ見え侍りける．

この筆者下線部が「花と実」のたとえが主体となる部分である．そして，この部分は天草本総序「読誦の人へ対して書す」にも見えるものである．天草本総序を掲げてみよう．

読誦の人へ対して書す．

惣じて人は実もなきたわむれ言には耳を傾け，真実の教化をば聞くに退屈するによって，耳近きことを集め，この物語を板に刻むこと，たとえば樹木を愛するに異ならず．その故は，植木には益なき枝葉多しといえども，そのなかに良き実あるをもって，枝葉を無用と思わぬがごとくなり．かるがゆえに，スペリヨレスの仰せをもって，この物語をラチンより日本の言葉に和げ，いろいろの穿鑿の後，板に開かるるなり．これ，まことに日本の言葉稽古のために便りとなるのみならず，良き道を人に教え語る便りともなるべきものなり．

この筆者下線部が古活字本の筆者下線部と対応する部分である．このように比較をすると，古活字本の筆者二重下線部，すなわち意味の通じない部分には，脱文があると推定できることになる．つまり，天草本の筆者二重下線部「板に刻むこと，たとえば樹木を愛するに異ならず．その故は，」を古活字本のこの「この巻物を」と「一本の植木には」との間に入れてみると，「この巻物を板に刻むこと，たとえば樹木を愛するに異ならず．その

故は，一本の植木には」となり，意味が通ずるようになるのである[18]．現存古活字本の祖本であったキリシタンの日本語訳本，すなわち筆者の言う「古活字本祖本」では，この部分は大体このような文脈であったのではなかろうか．古活字本祖本は出版されたものとは考えられないから，少なくとも「板に刻むこと」は問題となる．しかし，その辺のところは，たとえば「日本の言葉に和ぐること」等となっていたかなど，考え様があるようにも思われる．また，次のようにも考えられる．古活字本のこの意味の通じない「この巻物を一本の植木には必花実あり．」という文は，Tuppo 集の序文の日本語訳文中の「この庭園は，花とともに実をうみだす．」に対応するものと考えることができる．Tuppo 集の「この庭園」は「本書」（訳文参照）を指す比喩と考えられる．その比喩を古活字本編者（訳者）は「この巻物」と，説明的に日本語訳しようとしたのだが，その訳出に失敗した結果，このように意の通じない訳文になったのかと考えることもできるだろうと思うのである．しかし，どの考え方が適当であるかについては保留して，ここでは考え方を述べるだけにしておきたい．

ところで，天草本のこの「花と実」（「益なき枝葉」と「良き実」）のたとえを有する文章は，天草本の「総序」として在るのである．その点が古活字本の場合と大きく違うところである．しかし，Tuppo 集や1545年アントワープ刊本等との比較らか見れば，「庭鳥と玉」の寓話を含む古活字本の場合の方が原典の構造を反映していると考えざるをえない．つまり，天草本編者が古活字本祖本に依拠し，その寓話部の序であったものに手を加えて天草本の総序とした，という関係が考えられるのである．天草本編者は古活字本祖本の寓話部序から「庭鳥と玉」のたとえを除去し，そこに天草本出板のいきさつを述べる条を入れ，それを総序としたのであろう．だから，天草本には「庭鳥と玉」の話（寓話部第1話）が無いのである．

4

次に，古活字本寓話部序と天草本総序との共通点について述べてみよう．既に述べていることではあるが，まず，Tuppo 集や1545年アントワープ刊本等では，この「花と実」のたとえを持つ文章は寓話部の序として独立した一文章であるが，古活字本・天草本ではそうではないという点が挙げられる．古活字本・天草本では，それが一文章の導入部として用いられているのである．古活字本では，この導入部のあとに，「されば，庭鳥になぞらへてその事を———」と本題に入り，天草本では「かるがゆえに，スペリョレスの仰せをもって，———」と，本題に入る．Tuppo 集等の場合とは相違するという点において共通する古活字本・天草本のこの共通点は，既に述べた「庭鳥と玉」の話に続くという点で古活字本の場合の方が原典的であるというところから，天草本編者が古活字本祖本に依拠したという関係が考えられるのである．

この共通点は次の共通点と結び付いている．すなわち，Tuppo 集等のその序文の全体が導入部として用いられているというわけではないという点において，古活字本の場合と天草本の場合とは共通しているのである．

古活字本の筆者下線部「つらつら人間のありさまを案ずるに，」から「実はその誠をあらはせり．」までに対応する Tuppo 集等の寓話部序の部分を，日本語訳文で挙げると，

> 本書は，楽しみとなり，益あらんことを目指している（楽しみとなり，益あらんことを目指して本書を与える[19]）．荘重に描かれたものは，冗談以上に，笑いを誘うものである．

この庭園は，花とともに実をうみだす．花と実とは，好意（称賛）をかち得る．花は美しく輝き，実は良い味がするから．

となり，この範囲が古活字本の筆者下線部に対応すると言えるのである．この点は天草本の場合でも同様である．つまり，Tuppo 集では「楽しみ」と「益」とを「花」と「実」とにたとえ，「本書」（「この庭園」）はその二つを共に読者に与えると述べているのであるが，その主旨の部分を古活字本・天草本では利用しているのである．この共通点も，上述の共通点と共に，天草本編者が古活字本祖本に依拠したことを物語っていると言えるだろう．

さらに，古活字本・天草本には次のような共通点が見られるのである．Tuppo 集等では，その序文全体を通じて「楽しみ」と「益」，すなわち「花」と「実」とは，価値的に対等のものとして，相対的な関係に置かれていると言えるのであるが，古活字本・天草本ではそうではない．古活字本では，「花」は「色香」をたとえたものであり，「実」は「誠」をたとえたものである．そして，その両者の価値は対等ではない．「誠」すなわち「実」を「よき道」に通ずるものとし，「あくたなる色香」すなわち「花」を否定しているのである．「誠」すなわち「実」を絶対視しているのである．この価値観の違いに注目しなければならないであろう．古活字本のこの価値観，すなわち古活字本祖本編者（訳者）の価値観は，キリシタン的価値観の反映と考えてよいであろう[20]．

そして，そのキリシタン的価値観が，天草本ではさらに徹底したものとなっていると言える．天草本では「花」（すなわち「楽しみ」）という観念は消失する．すなわち，「花」に替わって「益なき枝葉」が登場し，それが「良き実」と対しているのである．「益なき枝葉」とは，「実もなきたわむれ言」をたとえたものであり，「良き実」とは「真実の教化」（真実の教え）をたとえたものである．この価値観は古活字本の場合，すなわち古活字本祖本の場合よりもいっそう徹底したものであり，キリシタンの伝道的価値観（キリスト教的価値観）が表面に顕われたものと言ってよいであろう．

この点も，Tuppo 集等の場合とは一致しないという点において共通する古活字本・天草本の共通点として指摘することができ，その古活字本（古活字本祖本）と天草本との間には，価値観の徹底という点でこのような程度の差が見られるのである．天草本の場合のキリスト教的価値観の顕現は，天草本の場合が単なる寓話部序ではなく，総序として在るということと関係する問題であろう．そして，このような点から見ても，天草本編者が古活字本祖本に依拠しているということが考えられるのである．

5

この序文を有する，前述の1610年フランクフルト刊『Mythologia Æsopica』所収の『Anonymi Fabvlæ Æsopeæ』（無名氏によるイソップ寓話集）という寓話集は，上田敏氏が『伊曽保物語考』で，ロムルス集の系統を，

㈠ Romulus 集．喩言八十三，普通之を四巻に別つ．最古の写本は大英博物館蔵，十世紀の筆跡．

㈡ Æsopus ad Rufum 或は略して Rufus 集．喩言八十二．此写本，前は Wisseburg 今は Wolfenbüttel にある．

㈢ Anonymus Nilanti 集．一七〇九年 Nilant 之を刊行した故，此名がある．喩言六十七．後の研究にて十一世紀の人 Ademar de Chabannes の編と定まり，Ademar 集ともいふ．

と，三種を挙げ，これについて，

　此他なほ多少の変化ある異本数種はあるが，皆上述三系統のどれかに属してゐる．而して此三者は中世喩言集の根元に対して三段の階梯をなしてゐるので，アドマル集が最も源泉に近く，ルウフス集之に次ぎロムルス集が最も遠ざかつてゐる．而してこの源泉とは何ぞと研究してみると，奚(いづくん)ぞ知らむ，かの有名なる羅甸短長律(ラテンヤムブス) Phædrus 喩言集ならむとは．要するに中世の散文喩言集はファイドルスの転訛である．随つて今日の所謂伊曽保物語はファイドルスに多少の増補を加へたものである．

と述べられるが，この『Anonymi Fabvlæ Æsopeæ』60話は，その㈢のアドマル集の系統のものであろうか．

なお，上田氏の上述の論考第一七節には，さらに次のように在る（筆者下線部）．

　マリイが喩言集以来十二世紀の英国は一時実に喩言の本国の如く見えた．現に種々のロムルス集が，此国で筆写され，殊にロムルス集一二三巻を羅甸の聯句に書き改めた写本は Garicius, Garritus, Galfredus, Hildebertus, Ugobardus de Salmone, Waltherus, Salo, Salone, Serlo, Bernard de Chartres, Accius, Alanus 等の名で非常に広く愛読された．Névelet が一六一〇年フランクフルトで Mythologia Aesopica に出板した集は即ちこれである．所謂 Anonymus Neveleti であるが，エルヰウの穿鑿に依つて，今此書の撰者は Gualterus Anglicus (Walter of England) と定まつた．

そうすると，『Anonymi Fabvlæ Æsopeæ』は上掲の論考における㈢のアドマル集系なのであろうか，それとも㈠のロムルス集喩言83話（全4巻，各巻約20話）から第3巻までを挙げ，第4巻を除去したものと考えるべきものであろうか．

それはそれとして，ここで改めて次のことが問題となるのである．古活字本の寓話部はシュタインヘーヴェル集の寓話部，そしてその英訳であるカクストン集の寓話部とその構造が一致するのであるが[21]，そのカクストン集寓話部における最初の寓話集ロムルス集の第1巻の序「¶Here begynneth the preface or prologue of the fyrste book of Esope」の内容は次のようなものなのである．

　[I] Romulus sone of Thybere of the Cyte of Atyque, gretyng, Esope man of Grece, subtyle and Ingenyous, techeth in his fables how men ought to kepe and rewle them well, And to thende that he shold shewe the lyf and customes of al maner of men, he induceth the byrdes, the trees and the beestes spekynge to thende that the men may knowe wherfore the fables were found, In the whiche he hath wreton the malyce of the euylle people and the argument of the Improbes, He techeth also to be humble and for to use wordes, And many other fayr Ensamples reherced and declared here after, the whiche I Romulus haue translated oute of Grekes tongue in to Latyn tongue, the whiche yf thou rede them, they shalle aguyse and sharpe thy wytte and shal gyue to the cause of Ioye.

カクストン集ではこの序文の後に，寓話第1話すなわち「¶The fyrst fable is of the Cok and of the precious stone」（庭鳥と玉）が置かれるのである．さて，この序文であるが，ここには「花と実」のたとえは登場しない．つまり，これは Tuppo 集等の場合とは違う序文なのである．それでは，シュタインヘーヴェル集の場合はどうであろうか．小堀桂一郎氏の「『伊曽保物語』原本考（上）」[22]によると，シュタインヘーヴェル集におけるロムルス集第1巻の序文は「(Incipit prefatio——Incipit fabularum liber primus——序言——寓話第一巻の始め)」とあり，その内容については，「序言はロムルスといふアテ

ネの都人士がその息子ティベリウスに向つてイソポの寓話を教訓として語りきかせるといふ体裁.」とあるから，上掲のカクストン集の序文はその英訳そのものと言えるだろう．そうすると，同じシュタインヘーヴェル集系の一本であったと考えられる古活字本祖本の原典の場合はどうであったのかということになる．つまり，古活字本祖本の原典の場合は，シュタインヘーヴェル集系でありながら，この内容の序文ではなく，Tuppo 集等の場合の「花と実」のたとえを有する序文が在ったのかということになるのである．

6

筆者は何よりもまず古活字本寓話部の構造がシュタインヘーヴェル集の寓話部の構造に一致するという点を重視しなければならないと考える．Tuppo 集等の寓話部は，シュタインヘーヴェル集寓話部の第1寓話集ロムルス集の第1巻から第3巻までに対応すると言えるのであるから，これらの集もやはり何らかの意味ではシュタインヘーヴェル集系と考えてよいのではないであろうか．そうすると，古活字本祖本の原典は，その寓話部の構造はシュタインヘーヴェル集と一致し，その寓話部序文としては Tuppo 集等の「花と実」のたとえを有する序文が在ったものと考えざるをえなくなるのである．

以上

〔追記〕
本論では吉田昌市氏のお世話になった．Tuppo 集等の序文の日本語訳を快くお引き受け下さった氏の御好意に感謝を捧げる．なお，他にも多くの問題が残されているが，それらについては近刊予定（昭和58年2月）の拙著『邦訳二種伊曽保物語の原典的研究・正編』（風間書房）において論じさせていただく．

注

1. 国立国会図書館蔵無刊記十一行本．
2. 「その1」(国学院雑誌第78巻第4号・昭和52年4月)．「その2」(同上第78巻第7号・昭和52年7月)．「その3」(同上第78巻第8号・昭和52年8月)．「その4」(同上第79巻第7号・昭和53年7月)．「その5」(同上第79巻第12号・昭和53年12月)．
3. 「徳島大学学芸紀要（人文科学）」第30巻（昭和55年11月）．
4. 天理図書館編『欧本イソップ物語』(善本写真集第三十八・昭和47年10月）に解説有り．
5. 改造社版『現代日本文学全集第二十篇』（昭和4年）の「上田敏集」所収のものに拠る．この論は J. Jacobs の『History of the Aesopic Fable』(1889) に依拠したものである．昭和3年7月7日の，京都大学楽友会館での「伊曽保物語展観」の目録に「Joseph Jacobs 著，カックストン伊曽保物語書志及び伊曽保流喩言史（英文）二冊」とあるのがこの書で，この条には「一八八九年刊，上田敏博士旧蔵，京大図書館現蔵」とある（目録は新村出全集第7巻に拠る)．
6. この点，すなわちカクストン集寓話部の全構造（「注2」の拙論「その5」参照）に一致するのではなく，カクストン集寓話部における第1寓話集ロムルス集全4巻の第3巻までしか対応しないという点，また，以下で述べる「序文」の点から考えて，この Tuppo 集が上田敏氏の「一伊太利亜には一四八五年の Tuppo 訳，――」と『伊曽保物語考』で述べられるシュタインヘーヴェル集のイタリア語訳本に直接該当すると見ることには無理があると思われる．
7. これらの本文はイタリア語訳文，そして解説と言えるだろう．「ymago」は日本語訳すると「映像・似姿・写し」（羅葡日対訳辞書で「imago」を見ると，「影，又は写し，又は絵像，木像など.」という意がある）等となり，この見出しによる本文がイタリア語訳本文である．以下，「解説」であるが，「tropologia」は「比喩的表現」(羅葡日対訳辞書を見ると，「人の形儀を直すため

に，たとえを引いて言う物語.」という釈義がある）という意で，本文の比喩について述べたものであろう．以下の「allegoria」（比喩・風喩）・「anagoge」（神秘的解釈・解釈）・「exemplum」（模範・見本・例．羅葡日対訳辞書を見ると「――．談義などに引く故事証拠などを言う」という釈義がある）については不分明な点があるが，これらを一括して「解説」と呼んでおいても差し支えないであろうと思う．

8. 「注4」.

9. 「注4」．なお，以上三種の序文の語句の相違は次のようになる（下線部＝他二者との相違）．

Tuppo 集下線部	1545年本	Anonymi Fabulæ
① IVVET	iuet	iuuet
② CONATVR	donatur	conatur
③ fauorẽ	fauores.	fauorem
④ hic nitet:	hic sapit,	hic sapit,
⑤ ille sapit.	ille nitet.	ille nitet.
⑥ sopiret	sopitet	sopiret
⑦ mouit	nouit	mouit
⑧ precium	precium	pretium
⑨ uili	vigili	vili
⑩ complue	impleat	implue
⑪ rore	ore	rore
⑫ tuo.	suo.	tuo.
⑬ leuitas	leuitas	lenitas
⑭ honustum:	honestum.	honestum.

10. 筆者が吉田昌市氏（徳島大学助教授・教養部・哲学）に日本語訳を依頼した，その訳文．

11. この部分は1545年アントワープ刊本の場合では，「楽しみとなり，益あらんことを目指して本書を与える」という意となる（吉田氏注釈）．「注9」参照．

12. アントワープ刊本および Anonymi Fabulæ Æsopeæ の場合は「hic sapit, ille nitet」となっており，「実は良い味がし，花は美しく輝くから」という順序となる．「注9」参照．

13. この「眠らせる」の部分は，アントワープ刊本では「sopitet」となっており，意味不明．Tuppo 集および Anonymi Fabulæ の場合は「sopiret」で，「眠らせる」という意になる（吉田氏注釈）．「注9」参照．

14. この「仕事をした」の部分は，アントワープ刊本では，「労苦（労働）を知った」(nouit opus) という意になる（吉田氏注釈）．「注9」参照．

15. この「卑しい土地」の部分は，アントワープ刊本では「vigil な土地」とあり，下線部は「目ざめている・張り番をしている」という意の形容詞であるが，それは「土地」という語とは合わない．Tuppo 集および Anonymi Fabulæ の場合は「vilis」という形容詞が用いられており，訳文のような意となる（吉田氏注釈）．「注9」参照．

16. この「高貴な収穫」の部分は Anonymi Fabulæ の本文に拠る訳．Tuppo 集およびアントワープ刊本の場合では「祈りの収穫」となり，意が通じない（吉田氏注釈）．「注9」参照．

17. この「ぬらして下さい」の部分は Anonymi Fabulæ の本文に拠る訳．Tuppo 集の場合は「complue」となっており，このままでは意味不明．似た語を探すと「comple」があるが，この語で考えると「満たして下さい」の意となる．また，この文はアントワープ刊本では「乾いた言葉を神が御自身の口によって豊かにして（完成して）下さるように」という意となる（吉田氏注釈）．「注9」参照．

18. 岩波日本古典文学大系『仮名草子集』所収「伊曽保物語」の森田武氏の「この巻物」の頭注にも次のようにある．「前章末尾の『いそほが物語』をさすのであろう．この部分，諸本とも底本

に同じだが，ここに脱文があるか．天草版の序に『ウエキ（樹）ニハ益ナキ枝葉多シト雖モ，ソノ中ニ良キ実アルヲ以テ枝葉ヲ無用ト思ワヌガ如クナリ』とある．このように『巻物』を樹木にたとえる意味の語句が脱しているのであろう．」．

19. 「注11」．

20. 吉田氏の言によれば，この「楽しみ」と「益」(juvet et prosit) に，それらを相対的概念として表現しようとする意図が果たしてどの程度有るかということが疑問となるということである．筆者は，この「楽しみ」と「益」をたとえたものが「花」と「実」であると考えるのであるが，一方，この「花」と「実」は「注12」のようにアントワープ刊本および Anonymi Fabulæ の場合は「実」と「花」という順序となる．そうすると，「楽しみ」をたとえたものが「実」，「益」をたとえたものが「花」ということになり，たとえの意図が不分明なものとなってしまう．しかし，三種の刊本の中で最も古い Tuppo 集の場合は，「美しく輝く花」と「よい味がする実」とは「楽しみ」と「益」とをたとえたものであると確かに考えられるのである．このたとえの関係から考えると，「楽しみ」と「益」とは二つの概念として表現されているものと考えざるをえなくなるのである．

21. 「注２」の「いそぼ物語試論・その５」．

22. 岩波書店『文学』(1978. 10. VOL. 46) 所収．

Summary

I selected 'Vita et fabulae'* in the Tenri Library, and tried comparing the preface of the fables in it with that of the fables in 'Isopomonogatari'.**

The preface in 'Isopomonogatari' corresponds with that in 'Vita et fabulae'. Nevertheless, the number of the fables in 'Isopomonogatari' is not the same with that in 'Vita et fabulae'.

The fables in 'Isopomonogatari' are the same with those in Steinhöwel's Aesop's Fables.*** But I cann't find the preface like that of 'Isopomonogatari' in Steinhöwel's Aesop's Fables.

As a result of my research, I am convinced that the original text of 'Isopomonogatari' held the preface like that in 'Vita et fabulae', and on the other hand, I convinced, it held the same number of the fables in Steinhöwel's Aesop's Fables.

Ref. * Aesop's Fables in Latin of the incunabular edition; with the Italian translation of Francesco del Tuppo, Napori, 1485.

** Aesop's Fables in Japanese; the 'Kokatsujiban' edition in the early Edo period.

*** Published about in 1480; Caxton's Aesop's Fables whose original text is Steinhöwel's Aesop's Fables.